

源氏物語

橋姫

紫式部

青空文庫

しめやかにこころの濡れぬ川霧の立ち

まふ家はあはれなるかな
(晶子)

そのころ世間から存在を無視されておいでになる古い親王がおいでになった。母方なども高い貴族で、帝の御継嗣におなりになつてもよい御資格の備わつた方であつたが、時代が移つて、反対側へ政権の行つてしまうことになつた變動のあとでは、まったく無勢力な方におなりになつて、外戚の人たちも輝かしい未来の希望を失つたことに皆悲観をして、だれもいろいろな形でこの世から逃避をしまい、公にも私にもたよりのない孤立の宮でおありになるのである。夫人も昔の大臣の娘であつたが、心細い逆境に置かれて、結婚の初めに親たちの描いていた夢を思い出してみると、あまりな距離のある今日の境遇が悲しみになることもあるが、唯一の妻として愛されていることに慰められていて、互いに信頼を持つ相愛の御夫妻ではあつた。年月がたつても子をお持ちになることがなかつたために、寂しい退屈をまぎらすような美しい子供がほしいと宮は時々お言いになるのであつたが、思いがけぬころに一人の美しい女王が生まれた。これを非常に愛してお育てになる

うちに、また続いて夫人が妊娠した時に、今度は男であればよいとお望みになったにかかわらずまた姫君が生まれた。安産だったのであるが、産後に病をして夫人は死んだ。この悲しい事実の前に宮は歎なげきに溺おぼれておいでになった。世の中にいればいるほど冷遇されて、堪えがたいことは多くても、捨てがたい優しい妻が自分の心を遁とんせい世の道へおもむかしめない絆ほどしになつて、今日までは僧にもならなかつたのである、一人生き残つて男やもめになつたことは堪えがたいことではないが、小さい子供たちを男手で育ててゆくことも親王の体面としてよろしくないことであるから、この際に入道しようところも宮は思おほしめ召したのであるが、保護者もない二人の幼い姫君をお捨てになることを悲しく思召して、そのまま実行を延ばしておいでになるうちに年月がたち、それぞれ成長していく女王たちの美しい顔を御覧になるのを、毎日お慰めにして暮らしておいでになった。あとで生まれたほうの女王を侍女たちも、

「この方のお産があつて奥様がお亡なくなりになつたと思つたと残念な気がして」

こんなことを言つて熱心に世話もしないのであつたが、宮は終しゆうえん焉んの床で、夫人がもう意識も朦朧もうろうになつていながら、生まれた姫君を気がかりに思うふうで、

「私はもう生きられませんかから、この子だけを形見だとお思ひになつて愛してやってくだ

さう」

と一言だけ言い置いたことをお思いになつて、夫人の命の亡ぶ際にこの世へ出た子に對しては、その宿命が恨めしくお思いになるはずであるが、私の思召しでこうなつたのであろう、命の終わりにまでこの子をかわいく思い、自分に頼んで行つたのであるからとことさらこの女王を愛しておいでになつた。端麗な容貌ようぼうで、普通の美に超こえた姫君であつた。姉君は静かな貴女きじよらしいところが見えて、容貌にも身のとりなしにもすぐれた品のよさのある女王であつた。宮がこの姫君をたいせつにあそばすお気持ちにはまた格別なものがあつて、どちらも劣りまさりなくおかしきになつていたが、お心になわぬことが多く、年月に添えて宮家の御財政は窮迫していつた。女房たちも心細めのとがつて辛抱しんぼうができずに一人一人とお邸やしきから出て行つた。夫人の死んだ際で、妹君の乳母めのとなどにも適当な人間をお選びになる余裕もなかつたため、身分の低い乳母には低い節操よりなくて、まだ姫君の小さいうちにお邸やしきを出てしまつた。それ以後は宮がお手ずから幼い女王の世話をあそばされた。さすがにお邸は広くてみごとなものであつたが、池や山の形にだけ以前の面影を残して荒廢する庭を、つれづれな御生活の宮はよくながめておいでになつた。家司けいしなどにも氣のきいた者などはなくて、修繕を少しずつ加えるような方法もとらないから、雑草が高く伸

び、軒の忍草しのぶが得意に青をひろげていた。その季節季節の草木も、同じ趣味のある夫人といっしょにおながめになることで昔はお心の慰めになったのであるが、孤独の今の宮のお目はそうした自然の色もただ寂しく親しめないものに見られて、持仏の装飾だけを特にごりつぱにおさせになり、毎日仏勤めばかりをしてお暮らしになった。子という絆きずなに引かれて出家のできぬことすら不幸な運命であると残念がられる宮でおありになったから、まして普通の人がするような再婚などを今さらしようとは思わぬ、とこういう気持ちは年月と共に加わり、それだけ世の中から遠のいておゆきになる宮であつて、お心だけは僧と同じになつておいでになり、夫人の歿後ぼつごは異性をお求めになるようなお心は戯れにもお持ちになることはなかつた。

「そんなにいつまでも夫人のことばかりを思つておいでにならないでもないではないか。妻に死別した直後にはこれほど悲しいことはないと思うのが普通だろうが、時がたてばたつたように心境の変化がなくてはならない。世間のだれもがするようにあとの夫人を選定されて、結婚をなすつたら、宮家の心細い御経済も緩和されると思うが」

こんなお陰かげぐち口も言いながら似合わしい第二の夫人のお取り持ちをしようとする人たちも相当多いのであるが、宮は耳をお傾けにならなかつた。

念誦ねんじゆをあそばすひまひまは姫君たちの相手におなりになって、もうだいぶ大きくなつた二女王に琴の稽古けいこをおさせになつたり、碁を打たせたり、詩の中の漢字の偏を付け比べる遊戯をおさせになつたりしてごらんになるのであるが、第一女王は品よく奥深さのある容貌ようぼうを備え、第二の姫君はおおようで、可憐かれんな姿をして、そして内気に恥ずかしがるふうのあるのもとりどりの美しさであつた。春のうらかな日のもとで池の水鳥が羽を並べて游泳ゆうえいをしながらそれぞれにさえずる声なども、常は無関心に見もし、聞きもしておいでになる心に、ふと番つがいの離れぬうらやましさをお感じさせる庭をながめながら、女王たちに宮は琴を教えておいでになつた。小さい美しい恰かつこう好でそれぞれの楽器を熱心に鳴らす音もおもしろく聞かれるために、宮は涙を目にお浮かべになりながら、

「打ち捨ててつがひ去りにし水鳥のかりのこの世に立ち後おくれけん

悲しい運命を負っているものだ」

とお言いになり、その涙をおぬぐいになつた。御容貌のお美しい親王である。長い精進の御生活にやせきつておいでになるが、そのためにまたいつそう艶えんなお姿にもお見えにな

つた。姫君たちとおいでになる時は礼儀をおくずしにならずに、古くなつた直衣のうしを上に着ておいでになる御様子も貴人らしかった。大姫君が硯すずりを静かに自身のほうへ引き寄せて、手習いのように硯石の上へ字を書いているのを、宮は御覧になつて、

「これにお書きなさい。硯へ字を書くものでありませんよ」
と、紙をお渡しになると、女王は恥はずかしくそうに書く。

いかでかく巢立ちけるぞと思ふにもうき水鳥の契りをぞ知る

よい歌ではないがその時は身に沁しんで思われた。未来のあるいい字ではあるがまだよく続けては書けないのである。

「若君もお書きなさい」

とお言いになると、これはもう少し幼い字で、長くかかつて書いた。

泣く泣くも羽うち被きする君なくばわれぞ巢守もりになるべかりける

もう着ふるした衣服を着ていて、この場に女房たちの侍しているものもない、可憐な美しい姉妹きょうだいを寂しい家の中に御覧になる父宮が心苦しく思召さないわけでもない。経巻を片手にお持ちになつて御覧になり、宮は琴に合わせて歌をうたつておいでになつた。

大姫君には琵琶びわ、中姫君（三女のなき時も次女は中姫と呼ぶ）には十三絃げんの琴をそれに合わせながら始終教えておいでになるために、おもしろく弾くようになっていた。父帝にも母女御にも早くお死に別れになつて、はかばかしい保護者をお持ちにならなんだために、宮は学問などを深くあそばす時がなかつた。まして処世法などは知つておいでになるわけもない貴人と申してもまた驚くばかり上品で、おおような女のような弱い性質を備えておいでになつて、父帝からお譲りになつた御遺産とか、外戚がいせきの祖父である大臣の遺産とか、永久に減るものと思われない多くのものが、どこへだれが盗んで行つたか、なくなつたかもしれないぬことになつてしまつて、ただ室内の道具などにだけ華奢かしやな品々が多く残つていた。伺候する者もなく、お力になつて差し上げようとする人たちもない。御徒然なために音楽寮の音楽専門家のうちのすぐれたのをお呼び寄せになり、芸事ばかりを熱心にお習いになつて大人おとなにおなりになつた方であるから、音楽にはひいでておいでになるのである。光源氏の弟宮の八の宮と呼ばれた方で、冷泉院れいせいが東宮でおありになつた時代に、朱雀院すざくの御

母后が廢太子のことを計画されて、この八の宮をそれにお代えしようときれ、その方の派の人たちに利用をおされになったことがあるため、光源氏の派からは冷ややかにお扱われになり、それに続いてこの世は光源氏派だけの榮える世になって今日に及んでいるのであるから、八の宮は世の中と絶縁したふうにおなりになり、その上に不幸のために僧と同じような暮らしをあそばして、現世げんぜの夢は皆捨てておしまいになったのである。

そのうちに八の宮のお邸やしきは火事で焼亡してしまった。この災難のために京の中でほかにお住みになるほどの所も、適当な邸もおありにならなかつたので、宇治によい山莊を持つておいでになったから、そこへ行って住まれることになった。世の中に執着はお持ちにならぬが、いよいよ京を離れておしまいになることは宮のお心に悲しかった。網代あじろの漁をする場所に近い川のそばで、静かな山里の住居すまいをお求めになることには適せぬところもあるがしかたのない御事であった。町の中でなく山や水の景には恵まれた里であつたから、それらをながめては寂しい物思いを多くお作りになる宮であつた。こうした都に遠い田舎いなかへお移りになつても、妻がいたならばという歎きをあそばさない時とはなかつた。

見し人も宿も煙となりにしをなぞてわが身の消え残りけん

これではお生きがいもあるまいと思われるほど故人にこがれておいでになるのであった。京にお住いになった時すら来訪がなかったのであるから、山の重なった中へはるばるお訪ねする人などはない。朝立った霧が終日山を這っている日のような暗い気持ちで宮は暮らしておいでになったが、この宇治に聖僧として尊敬してよい阿闍梨あじやりが一人いた。仏道の学問の深くあることを世間からも認められていながら、宮廷の御用の時などにもなるべく出るのを避けて、宇治の自坊にばかりこもっているのであったが、八の宮が宇治の山荘へ移っておいでになって、孤独な生活をお始めになり、仏道を研究されようとして、宗教の書物を読んでおいでになるのを知って、ありがたいことに思い時々御訪問に来るのであった。今まで独学的に読んでおいでになった書物に書かれたことの、深い意味と理解のしかたをお授けするようなことも阿闍梨はできた。この世はただかりそめのものであること、味気ない所であることをさらにこの僧からお教えられになって、

「もう心だけは仏の御弟子みでしに変わらなないのですが、私には御承知のように年のゆかぬ子供がいることで、この世との縁を切りえずに僧にもなれない」

などと、お思いになることも隔てなく阿闍梨へ宮はお語りになるのだった。この阿闍梨

は冷泉院へもお出入りしていて、院へ経などをお教え申し上げる人であった。ある時京へ出たついでに宇治の阿闍梨は院の御所へまいったが、院は例のような仏書をお出しになつて質問などをあそばした。その日に阿闍梨が、

「八の宮様は御聡明そうめいで、宗教の学問はよほど深くおできになつております。仏様に何かのお考えがあつてこの世へお出しになつた方ではございますまいか。悟りきつておいでになる御心境はりっぱな高僧のようにもお見えになります」

こんなお話をした。

「まだ出家はされていないのか。『俗ぞく聖ひじり』などと若い者たちが名をつけているが、お気の毒な人だ」

と院は言つておいでになつた。薰かおるの中将もこの時御前にいて、自分も人生をいとわしく思いながらまだ仏勤めもたいしてようせずに、怠りがちなのは遺憾であると心の中で思い、俗ながら高僧の精神で生きるのにはどんな心得があるのであらうと、八の宮のお噂うわさに耳をとめていた。

「出家のお志は十分にお持ちになるのでございますが、最初は奥様へのお思いやりで躊躇ちゆうちゆうなされましたし、今日になつてはまた哀れな女にょおう王がたを残しておかれることで決断

「がつかないと御自身で仰せになります」

阿闍梨はこう院へ申し立てていた。優美なふうはないが、音楽だけは好きな阿闍梨が、

「八の宮の姫君がたが合奏をなさいます琴や琵琶の音が私の寺へ、宇治川の波音といっしよに聞こえてまいりますのが、非常にけっこうで、極楽の遊びが思われます」

こんな昔風なほめ方をするのに、院の帝はみかど微笑をお見せになって、

「そんな聖の家で育てられていては、そうした芸術的な趣味には欠けているかと想像もされるのに珍しいことだね。宮が気がかりにお思になる人を、順序から言つて私のほうがしばらくでも長くこの世におられるとすれば、私へ託してお置きにならないだろうか」

とも仰せられた。院の帝は十の宮でおありになった。朱雀院すゑとくが晩年に六条院へお託しになった姫宮の例をお思になつて、その姫君たちを得たい、つれづれをあるいは慰められるかもしれないと思召すのである。年の若い薫中將はかえつて姫君たちの話せんぼうに好奇心などは動かされずに、八の宮の悟り澄ましておいでになる御心境ばかりが羨望せんぼうされて、お目にかかりたいと深く思うのであつた。

阿闍梨が帰つて行く時にも、

「必ず宇治へ伺わせていただいて、宮のお教えを受けようと私は思いますから、あなたか

らまず内々思召しを伺つておいてください」

と薫は頼んだ。院の帝はお言葉で、

「寂しいお住居すまいの御様子を人づつてで聞くことができました」

とも宮へお伝えさせになった。また、

世をいとふ心は山に通へども八重立つ雲を君や隔つる

という御歌もお託しになった。

阿闍梨は八の宮をお喜ばせするこのお役の誇りを先立てて山莊へまいった。普通の人から立てられる使いもまれな山やま蔭かげへ、院のお便りたよを持って阿闍梨が来たのであったから、宮は非常にうれしく思召して山里らしい酒しゅこう肴さかなもお出しになっておねぎらいになった。お返事、

跡たえて心すむとはなければども世を宇治山に宿をこそ借れ

宗教のことは卑下してお言いにならず、寂しい人間としての御近況をお報じになったために、院は宮がまだ不平をこの世に持つておいでになるものとして御同情をあそばされた。

阿闍梨は薫中將が宗教的な人物であることなどをお話しして、

「仏道の学問を深くしたい望みを少年時代から持つていたのでございますが、専念にそのほうを勉強いたしますことは、私ごとき頭腦のよろしくないものが、優越者か何かのようにこの世を見下すまぢがった態度のように思われますのを、それ自体がまぢがったことでしょうか、恐れておりまして、目だたせずしようといたしますために、怠ることに成り、ほかのことに紛れるようになりいたしまして今日までまいったのですが、けっこうな御境地に達しておられますあなた様のことを承ったものですから、ぜひお教えを得たいと望まれてなりませんなどと丁寧なお言づてを受けてまいりました」

などと語った。宮は、

「人生をかりそめと悟り、いとわしく思う心の起り始めるのも、その人自身に不幸のあった時とか、社会から冷遇されたとか、そんな動機によることですが、年がまだ若くて、思うことが何によらずできる身の上で、不満足などこの世になさそうな人が、そんなにまた後世のことを念頭に置いて研究して行こうとされるのは珍しいことですね。私などはどう

した宿命だったのでしようか、これでもこの世がいやにならぬか、これでも濁世じよくせを離れる気にならぬかと、仏がおためしになるような不幸を幾つも見たあとで、ようやく仏教の精神がわかつてきたが、わかつた時にはもう修行をする命が少なくなっていて、道の深奥のりを究めることは不可能とあきらめているのだから、年だけは若くても私の及ばない法の友かと思われる」

とお言いになつて、その後双方から手紙の書きかわされることになり、薫中將が自身でお訪ねたずして行くようになった。

阿闍梨から話に聞いて想像したよりも目に見ては寂しい八の宮の山莊であつた。仮の庵いおりという体裁で簡単にできているのである。山莊といつても風流な趣を尽くした贅ぜいたく沢なものであるが、ここは荒い水音、波の響きの強さに、思っていることも心から消される気もされて、夜などは夢を見るだけの睡眠が続けられそうもない。素朴そぼくといえは素朴、すごいといえはすごい山莊である。僧のごとく悟つておいでになる宮のためにはこんな家においてになることは、人生を捨てやすくなることであるが姫君たちはどんな気持ちで暮らしておいでになるであろう、世間の女に見るような柔らかな感じなどは失つておいでになるであろうとこんな観察も薫はされるのであつた。

仏間になつてゐる所とは襖からかみ子一重隔てた座敷に女王たちは住んでゐるらしく思われた。異性に興味を持つ男であれば、交際をし始めて、どんな性質の人たちかとまず試みたいという気は起こすことであらうと思われる空気も山荘にはあつた。しかしそうした異性に心の動かされぬ人たるべく遠くに師とする方を尋ねて来ながら、普通の男らしく山荘の若い女性に誘惑を試みる言行があつてはならないと薫は思い返して、宮のお気の毒な御生活を懇切に御補助することを心がけることにして、たびたび伺つては、かねて願つたように俗体で深く信仰の道にはいるその方法とか、あるいは経文の解釈とかを宮から伺おうとした。学問的ばかりでなく、柔らかに比喩ひゆをお用いになつたりなどして、宮が説明あそばすことはよく薫の心にはいつた。高僧と言われる人とか、学才のある僧とかは世間に多いがあまりに人間と離れ過ぎた感がして、きつい気のする有名な僧都そうずとか、僧正とかいうような人は、また一方では多忙でもあるがために、無愛想ぶあいそうなふうを見せて、質問したいことも躊躇ちゆうちよされるものであるし、また人格は低くてただ僧になつてゐるといふ点にだけ敬意も持てるような人で、下品な、言葉づかひも卑しいのが、玄人くろうとらしく馴れた調子で経文の説明を聞かせたりするのは反感が起こることもあつて、昼間は公務のために暇がない薫のような人は、静かな宵よいなどに、寢室の近くへ招いて話し相手をさせる気になれないもの

であるが、氣高い、優美な御風采の八の宮の、お言いになるのは同じ道の教えに引用される例なども、平生の生活により感化をお与えになる親しみの多いものを混ぜたりあそばされることで効果が多いのである。最も深い悟りに達しておられるというのではないが、貴人は直覚でものを見ることが穎敏であるから、学問のある僧の知らぬことも体得しておいになつて、次第になじみの深くなるにしたがい、薫の思慕の情は加わるばかりで、始終お逢いたくばかり思われ、公務の忙しいために長く山莊をお訪ねできない時などは恋しく宮をお思ひした。

薫がこんなふうになつて八の宮を尊敬するがために冷泉院からもよく御消息があつて、長い間そうしてお使いの來ることもなく寂しくばかり見え山莊に、京の人の影を見ることのあるようになつた。そして院から御補助の金品を年に何度か御寄贈もされることになつた。薫も何かの機会を見ては、風流な物をも、実用的な品をも贈ることを怠らなかつた。こんなふうでもう三年ほどもたつた。

秋の末であつたが、四季に分けて宮があそばす念仏の催しも、この時節は河に近い山莊では網代に当たる波の音も騒がしくやかましいからとお言いになつて、阿闍梨の寺へおいでになり、念仏のため御堂に七日間おこもりになることになつた。姫君たちは平生よりも

なお寂しく山荘で暮らさねばならなかつた。ちやうどそのころ薫中將は、長く宇治へ伺わないことを思つて、その晩のありあけつき有明月の上り出した時刻からしのび微行で、従者たちをも簡単な人数にして八の宮をお訪ねしようとした。河の北の岸に山荘はあつたから船などは要しないのである。薫は馬で来たのだつた。宇治へ近くなるにしたがい霧が濃く道をふさいで行く手も見えない林の中を分けて行くと、荒々しい風が立ち、ほろほろと散りかかる木の葉の露がつめたかつた。ひどく薫は濡ぬれてしまつた。こうした山里の夜の路みちなどを歩くことをあまり経験せぬ人であつたから、身にしむようにも思い、またおもしろいように思われた。

山おろしに堪へぬ木の葉の露よりもあやなく脆もろきわが涙かな

村の者を驚かせないために隨身に人払いの声も立てさせないのである。左右が柴垣しばがきになつている小路こみちを通り、浅い流れも踏み越えて行く馬の足音なども忍ばせているのであるが、薫の身についた芳香を風が吹き散らすために、覚えもない香を寝ざめの窓の内に嗅かいで驚く人々もあつた。

宮の山莊にもう間もない所まで来ると、何の楽器の音とも聞き分けられぬほどの音楽の
声がかすかにすぐく聞こえてきた。山莊の姉きょうだい妹いの女王にょおうはよく何かを合奏していると
いう話は聞いたが、機会もなく、宮の有名な琴の御音も自分はまだお聞きすることがで
きないのである、ちようどよい時であると思つて山莊の門をはいって行くと、その声は琵琶び
であった。所がらでそう思われるのか、平凡な楽音とは聞かれなかつた。掻かき返す音も
きれいでおもしろかつた。十三絃げんの艶えんな音も絶え絶えに混じつて聞こえる。しばらくこの
まま聞いていたく薫は思うのであつたが、音はたてずにも、薫のにおいに驚いて宿直とのい
の侍風の武骨らしい男などが外へ出て来た。こうこうで宮が寺へこもつておいでになると
その男は言つて、

「すぐお寺へおしらせ申し上げましょう」
とも言うのだった。

「その必要はない。日数をきめて行つておられる時に、おじやまをするのはいけないから
ね。こんなにも途中で濡ぬれて来て、またこのまま帰らねばならぬ私に御同情をしてくださ
るように姫君がたへお願いして、なんとか仰せがあれば、それだけで私は満足だよ」

と薫が言ふと、醜えみい顔に笑を見せて、

「さように申し上げましょう」

と言つて、あちらへ行こうとするのを、

「ちよつと」

と、もう一度薫はそばへ呼んで、

「長い間、人の話にだけ聞いていて、ぜひ伺わせていただきたく願つていた姫君がたの御合奏が始まつているのだから、こんないい機会はない、しばらく物蔭ものかげに隠れてお聞きしていたと思うが、そんな場所はあるだろうか。ずうずうしくこのままお座敷のそばへ行つては皆やめておしまいになるだろうから」

と言う薫の美しい風采ふうさいはこうした男をさえ感動させた。

「だれも聞く人のおいでにならない時にはいつもこんなふうにしてお二方で弾ひいておいでになるのでございますが、下人げにんでも京のほうからまいった者のごございます時は少しの音もおさせになりません。宮様は姫君がたのおいでになることをお隠しになる思召おぼしめしでそうさせておいでになるらしゅうございます」

丁寧な恰好かつこうでこう言うと、薫は笑つて、

「それはむだなお骨折りと申すべきだ。そんなにお隠しになつても人は皆知つていて、り

つばな姫君の例にお引きするのだからね」

と言つてから、

「案内を頼む。私は好色漢では決してないから安心するがよい。そうしてお二人で音楽を楽しんでおいでになるところがただ拝見したくてならぬだけなのだよ」

親しげに頼むと、

「それはとてもたいへんなことでございます。あとになりまして私がどんなに悪く言われることか知りません」

と言いながらも、その座敷とこちらの庭の間に透垣すいがきがしてあることを言つて、その垣へ寄つて見ることを教えた。薫の供に來た人たちは西の廊わたどのの一室へ皆通してこの侍が接待をするのだつた。

月が美しい程度に霧をきいている空をながめるために、簾すだれを短く巻き上げて人々はいた。薄着で寒そうな姿をした童女が一人と、それと同じような恰好かっこうをした女房とが見える。座敷の中の一人は柱を少し楯たてのようにしてすわっているが、琵琶を前へ置き、撥ぼらを手でもてあそんでいた。この人は雲間から出てにわかにもるい月の光のさし込んで來た時に、「扇でなくて、これでも月は招いてもいいのですね」

と言つて空をのぞいた顔は、非常に可憐かれんで美しいものらしかった。横になつていたほうの人は、上半身を琴の上へ傾けて、

「入り日と呼ぶ撥はあつても、月をそれでお招きになろうなどは、だれも思わないお考えですわね」

と言つて笑つた。この人のほうに貴女きじよらしい美は多いようであつた。

「でも、これだつて月には縁があるのですもの」

こんな冗談じようだんを言い合つている二人の姫君は、薫がほかで想像していたのとは違つて非常に感じのよい柔らかかみの多い麗人であつた。女房などの愛読している昔の小説には必ずこうした佳人のことが出てくるのを、いつも不自然な作り事であると反感を持ったものであるが、事実として意外な所に意外なすぐれた女性の存在を知つたと思うのであつた。

若い人は動揺せずにあられようはずもない。霧が深いために女王たちの顔を細かに見ることができないのを、もう一度また雲間を破つて月が出てくれればいと薫の願つているうちに、座敷の奥のほうから来客のあることを報じた者があつたのか、御簾みすをおろして、縁側に出ていた人たちも中へはいつてしまった。あわてたふうなどは見せずに、静かに奥

へ皆が引つこんだ氣配には聞こえてこようはずの衣擦れの音も、新しい絹の氣がないのか
添わないで寂しいが優雅で薫の心に深い印象を残した。

薫は隙見した場所を静かにはなれて、京へ車を呼ばせる使いを立てたりした。宮家の先
刻の侍に、

「宮様のお留守にあやにく伺つたのですが、あなたの好意で私は屈託を少し忘れることも
できましたよ。私の伺つたことをお奥へ申し上げてください。山路の夜霧に濡れながら
伺つた奇特さを認めていただくつもりです」

と薫が言うと、侍はすぐに奥へ行つた。薫が隙見をしたことなどは知らずに、弾いて遊
んでいた琵琶や琴の音のあるいは聞かれたかもしれないこととで姫君たちは恥ずかしく
思つた。よい香の混じつた風の吹き通つたことも確かな事実であつたが、思いがけぬ時刻
であつたために、薫中將の来訪とは氣のつかかなかつたのは、何たる神経の鈍いことであつ
たらうと二女王は羞恥に堪えられなく思うのであつた。取り次ぎ役の侍の氣のきかぬこ
とがもどかしくなつて、薫は無遠慮にあたるかもしれぬが、山莊住まいの現在の女王がた
はとがめもされまいと思ひ、まだ霧の深い時間であつたから、さっきのぞいたほうの座敷
の縁へ歩いて行き、御簾の前へすわつたのであつた。田舎風の染んだ若い女房などは客と

応答する言葉もわからず、敷き物を出すことすら不馴れであった。

「このお座敷の御簾の前にしか座が頂戴できないのでしようか。あさはかな心だけでは決して訪ねてまられるものでないと、何里の夜路をまいって自身でも認めうるのですから、御待遇を改めていただきたいものですね。たびたびこうしてこちらへ上がっております誠意だけはわかっていただいているものと頼もしくは思っております」

まじめに薫はこう言った。若い女房にはこの応対にあたりうる者もなく、皆きまり悪く上気している者ばかりであったから、部屋へ下がって寝ているある一人を、起こしにやっている間の不体裁が苦しくて、大姫君は、

「何もわからぬ者ばかりがいますから、わかった顔をいたしましてお返辞を申し上げますことなどはできないのでございます」

と、品のよい、消えるような声で言った。

「人生の憂さがわかりながら私の知らず顔をしていますのも、世の中のならわしに従っているだけなのです。宮様はすでに私の気持ちをお知りになっておられますのに、あなた様だけが俗世界の一人としか私をお認めくださらないのは残念です。世間を超越された宮様のこの御生活の中においでになりますあなた様がたのお心の境地は澄みきったものでしよ

うから、こうした男の志の深さ浅さも御明察くださつたらうれしいことだろうと私は思います。世間並みの一時的な感情で御交際を求める男と同じように私を御覧になるのではありませんか。私がどんな誘惑にも打ち勝つて来ている男であることは、すでに今までにお耳へはいつていることかとも思われます。独身生活を続けております私が求める友情を允許しただすつて、私もまた寂しいあなた様のお心を慰める友になりえて親密なおつきあいができましたらどんなにうれしいかと思われます」

などと薫の多く言うのに対して、大姫君は返辞がしにくくなって困つているところへ、起こしにやつた老女が来たために、応答をそれに譲つた。その女は出すぎた物言いをするのであつた。

「まあもつたいない、失礼なお席でございますこと。なぜ御簾みすの中へお席を設けませんでしたでしょう。若い人たちというものは人様の見分けができませんでねえ」

などと老人らしい声で言つていることにも女王たちはきまり悪さを覚えていた。

「この世においでになる人の数にもおあたりになりませんようなお暮らしをあそばして、当然おいでにならなければならぬ方でさえも段々遠々しくばかりなつておしまひになりますのに、あなた様の御好意のかたじけなさは、私ども風情ふせいのつまらぬ者さえも驚きの目

をみはるばかりでございます。でございますから、お若い女王様がたも常に感激はしておいでになりながらも、そのとおりにお話しあそばすことはおできにならないのでございましょう」

控えめにせず物なれたふうに言い続けることに反感は起りながらも、この人の田舎風いなかでなく上流の女房生活をしたらしい品のよい声こわづかいに薫は感心して、

「取りつきようもない皆さんばかりでしたのに、あなたが出て来てくださいます、私の誠心誠意をくんでいてくださる方を得ましたことは、私の大きい幸福です」

こう御簾に身を寄せて言っている薫を、几帳きちょうの間からのぞいて見ると、曙あけぼのの光でようやく物の色がわかる時間であったから、簡単な服装をわざわざして来たらしい狩衣姿かりぎぬの、夜露ゆに濡れたのもわかったし、またこの世界のものでないような芳香もそこには漂っていることにも気づかれた。この老女はどうしたのか泣きだした。

「あまり出すぎたことをしてお気持ちが悪くしましてはと存じまして、私は自分をおさえておりましたが、悲しい昔の話をどうかして機会を作りまして、少しでもお話しさせていただけ、あなた様の御承知あそばさなかったことを、お知らせもしたいということを私は長い間仏様の念誦ねんずをいたしますにも混ぜて願っておりましたその効験で、こうしたおりが

得られたのでしようが、お話よりも先に涙におぼれてしまいました、申し上げることができません」

身体からだを慄ふるわせて言う老女の様子に真剣味が見えて、老人はだれもよく泣くものであると知かっている薫かであつたが、こんなにまで悲しがるのが不思議に思われて、

「この御山荘へ伺うことになりましたからずいぶん年月はたちますが、こちらのほうにも一人もおなじみがなくて寂しくばかり思われていたのです。昔のことを知っておいでのなるといふあなたにお逢あいすることができて、私はにわかになつたのですから、この機会に何でもお話しく下さい」

と言つた。

「ほんとうにこんなよいおりはございません。またあるといたしましたが、私は老人でございませぬから、それまでにどうなるかもしれたものではありませんので、ただこうした老女がいると申すことを覚えておいていただくためにお話しいたします。三条の宮にお仕えしておりました小侍従が亡なくなりましたことはほのかに聞いて承知しておりました。昔親しくいたしました同じ年ごろの人がたいてい亡くなりましたあとで、この五、六年こちらとうの宮家へ私は御奉公いたしております。ご存じではございませぬ、ただいま藤大納言と

申し上げます方のお兄様で、衛門督えもんのかみでお亡かくれになりました方のことを何かの話の中でもお聞きになったことがございますでしょうか。私どもにとりましては、お亡かくれになりましたのがまだ昨日きのうのようにはかり思われまして、その時の悲しみが忘れられないのでございますが、数えてみますと、あなた様がこんな大人おとなにまでなっておいでになるだけの年月がたっているのでございますから、夢のようですよ。私はつまらない女でございましたが、人に知らせてならぬことで、しかもお心でお思いになりますことを私には時々お話ししてくださいだったのでございました。御病気がお悪くて、もう頼みのない時になりました、私をお呼びになって、少し御遺言をあそばしたことがあるのでございます。それはあなた様に御関係のあるお話なのでございましたから、これだけお話を申し上げましたあとを、まだお聞きになりたく思召すのでございましたら、また別な時間をお作りくださいまし。若い女房たちは私が出てまいって、あまりに話し込んでおりますことで、出すぎた真似まねをするように、反感を持ちまして何か言っておりますのももつともなことでございますから」

さすがにこれだけにとめて老女はあとを言おうとしなかった。怪しい夢のような話である。巫女みこなどが問わず語りをするようなものであると、薫は信を置きがたく思いながらも、始終心の隅すみから消すことのできない疑いに関したことであったから、なお話の核心に触れ

たくは思つたが、今もこの人が言つたように、女房たちが見ている所であつて、老女と二人向き合つて昔話に夜を明してしまふことも優雅なことではないと気がついて、

「私には何の心あたりもないことですが、昔のお話であると思ふと身にしみます。ですからぜひ今の話のあとをそのうちお聞かせください。霧が晴れて現わになつては恥ずかしい姿になつていて、私の心よりも劣つた形を姫君がたのお目にかけることになるのは苦痛ですから失礼します」

と薫が言つて、立つた時に宮の行つておいでになる寺の鐘がかすかに聞こえてきた。霧はますます濃くなつていて、宮のおいでになる場所と山荘の隔たりが物哀れに感ぜられた。薫は姫君たちの心持ちを思いやつて同情の念がしきりに動くのだった。二人とも引つ込みがちに内気なふうになるのも道理であるなどと思われた。

「朝ぼらけ家路も見えず尋ねこし檜まきの尾山は霧こめてけり

心細いことです」

と言つて、またもとの席に帰つて、川霧をながめている薫は、優雅な姿として都人の中

にも定評のある人なのであるから、まして山荘の人たちの目はどれほど驚かされたかもしれない。

だれも皆恥じて取り次ぐことのできないふうであるのを見て、大姫君がまたつつましいふうで自身で言った。

雲のゐる峰のかけぢを秋霧のいとど隔つる頃ころにもあるかな

そのあとで歎息たんそくするらしい息づかいの聞こえるのも非常に哀れであった。若い男の感情を刺激するような美しいものなどは何も無い山荘ではあるが、こうした心苦しきから辞し去ることが躊躇ちゆうちよ踏ふまれる薫であった。しかも明るくなっていくことは恐ろしくて、

「お近づきしてかえってまた飽き足りません感を与えられましたが、もう少しおなじみになりましてからお恨みも申し上げることにしましょう。お恨みというのは形式どおりなお取り扱いを受けましたことで、誠意がわかつていただけなかつたことです」

こんな言葉を残したままあちらへ行つた。そして宿直とくのいの侍が用意してあつた西向きの座敷のほうで休息した。

「網代あじろに人がたくさん寄っているようだが、しかも氷魚ひおは寄らないようじゃないか、だれの顔も寂しそうだ」

などと、たびたび供に来てこの辺のことがよくわかるようになっていた薫の供の者は庭先で言っている。貧弱な船に刈った柴しばを積んで川のあちらこちらを行く者もあつた。だれも世を渡る仕事の樂でなさが水の上にさえ見えて哀れである。自分だけは不安なく玉うてなの台に永住することのできるようにきめてしまうことは不可能な人生であるなどと薫は考えるのであつた。薫は硯すずりを借りて奥へ消息を書いた。

橋姫の心を汲くみて高瀬さす棹さの雫しづくに袖そでぞ濡ぬれぬる

寂しいながめばかりをしておいでになるのでしょう。

そしてこれを侍に持たせてやった。その男は寒そうに鳥肌とりはだになった顔で、女王の居間のほうへ客の手紙を届けに来た。返事を書く紙は香の焚たきこめたものでなければと思いなから、それよりもまず早くせねばと、

さしかへる宇治の川長朝夕の雫や袖をくたしはつらん

身も浮かぶほどの涙でございます。

大姫君は美しい字でこう書いた。こんなことも皆ととのつた人であると薫は思い、心が多く残るのであったが、

「お車が京からまいりました」

と言つて、供の者が促し立てるので、薫は侍を呼んで、

「宮様がお帰りになりますところにまた必ずまいります」

などと言つていた。濡れた衣服は皆この侍に与えてしまった。そして取り寄せた直衣のうしに薫は着がえたのであった。

薫は帰つてからも宇治の老女のした話が気にかかった。また姫君たちの想像した以上におおような、柔らかい感じのする美しい人であった面影が目に残つて、捨て去ることは容易でない人生であることが心弱く思われもした。薫は消息を宇治の姫君へ書くことにした。それは恋の手紙というふうでもなかった。白い厚い色紙に、筆を撰えらんで美しく書いた。

突然に伺つた者が多く語り過ぎると思召おぼしめさないかと心がひけまして、何分の一もお話

ができませんで帰りましたのは苦しいことでした。ちょっと申し上げましたように、今後はお居間の御簾の前へ御安心くださって私の座をお与えください。お山ごもりがいつで終わりますかを承りたく思います。そのころ上がりまして、宮様にお目にかかれませんでした心慰めたく存じております。

などとまじめに言つてあるのを、使いに出す左近将監である人に渡して、あの老女に逢つて届けるようにと薫は命じた。宿直の侍が寒そうな姿であちこちと用に歩きまわつたのを哀れに思い出して、大きな重詰めの料理などを幾つも作らせて贈るのであつた。そのまた宮のおこもりになつた寺のほうへも薫は贈り物を差し上げた。山ごもりの僧たちも寒さに向かう時節であるから心細かろうと思ひやつて、宮からその人々へ布施としてお出しになるようにと絹とか、綿とかも多く贈つた。

お籠りを済ませて寺からお帰りになろうとされる日であつたから、ごいっしょにこもつた法師たちへ、綿、絹、袈裟、衣服などをだれにも一つずつは分かれたるようにして、全体へ宮からお下賜になつた。

宿直の侍は薫の脱いで行つた艶な狩衣、高級品の白綾の衣服などの、なよなよとして美しい香のするのを着たが、自身だけは作り変えることができないのであるから似合わ

しくない香が放散するのを、だからも怪しまれるので迷惑をしていた。着物のために不行儀もできず、人の驚異とする高いにおいをなくしたいと思ったが、すぐこのできないのに苦しんでいるのも滑稽こっけいであつた。

薫は姫君の返事の感じよく若々しく書かれたのを見てうれしく思った。

宇治では寺からお帰りになつた宮へ、女房たちが薫から手紙の送られたことを申し上げてそれをお目にかけた。

「これは求婚者扱いに冷淡になどする性質の相手ではないよ。そんなふうを見せてはかえつてこちらの恥になるよ。普通の若者とは違つたすぐれた人格者だから、自分がいなくなつたらと、こんなことをただ一言でも言つておけば遺族のために必ず尽くしてくれる心だと私は見ている」

などと宮はお言いになつた。

宮から山寺の客に過ぎた見舞いの品々の贈られた好意を感謝するというお手紙をいただいたので、また宇治へ御訪問をしようと思つた薫は、におうみや 匂宮がああしたような、人に忘られた所にいる佳人を発見するのはおもしろいことであろう、予期以上に接近して心の惹ひかれる恋がしてみたいと、そんな空想をしておいになることを思い、宇治の女王によおうたち

の話を、やや誇張も加えてお告げすることによって、宮のお心を煽動してみようと思い、
閑暇ひまな日の夕方に、兵部卿ひょうぶきょうの宮をお訪ねたずしに行った。例のとおりいろいろな話をした
あとで、薫は宇治の宮のことを語り出した。霧の夜明けに隙見すきみしたことをくわしく説明す
るには宮も興味を覚えておいでになった。理想的な姫君だったと、薫はおおげさに技巧
を用いて宇治の女王の美を語り続けるのであった。

「その女王のお返事を、なぜ私に見せてくれなかつたのですか。私だつたら親友には見せ
るがね」

と宮はお恨みになった。

「そうですね。あなたはたくさんのお手もとへまいる手紙の片端すらお見せになりません。
あちらの女王がたのことは私のような欠陥のある人間などの対象にしておくべきではあり
ませんから、ぜひあなたのお目にかけていたい方々だと思つているのですが、どんなふうになら
れば御接近ができるでしょう。身分のない者は恋愛がしたければ自由に恋愛もできるので
すから、皆それ相当におもしろい恋愛生活はしているようですがね。男の興味を惹ひくよう
な女が物思いをしながら、世間の目から隠れて住んでいるようなことも郊外いなかとか田舎とか
にはあるのですね。その話の女性たちも人間離れのした信心くさい、堅い感じのする人た

ちであろうと、私は長く軽蔑^{けいべつ}して考えていまして、少しも興味が持てなかつたものです。ほのかな月の光で見た目が誤つておりませんでしたら、確かに欠点のない美人です。様子といい、身のとりなしといい、それだけの人は美の極致としてよいことになるかと思ひます」

と薫は言うのである。しまいには宮は真心から、普通の人などに心の惹^ひかれることのない人がこれほど熱心にたたえるのはすぐれた美貌^{びぼう}の主^{ひな}に違いないとお信じになるようになり、非常な興味を宇治の女王たちにお持ちになることになった。

「今後よくさぐつて来て私に知らせてください」

宮はこうお言いになつて、御自身の自由の欠けた尊貴さをいとわしくお思ひになるふうまでもお見せになるのを、薫はおかしく思った。

「しかし、そうした危険なことはしないほうがいいですね。この世へ執着を作るべきでないという信念を持つております私が、そうした中へはいつて行つて、自分ながら抑制できませんようなことになつては、すべての理想がこわれてしまうでしょうから」

「たいそうだね、例のとおりの方様くさいことを言っている君のその態度がいつまで続かなか見たいものだ」

宮はお笑いになった。

薫の心は宇治の宮で老女がほのめかした話からまた古い疑問が擡頭して、人生が悲しく見えてならないこのごろであつたから、美しい感じを受けたことにも、ほかから耳にはいつてくるすぐれた女性の噂などにも自身は興味をそう持てないのであつた。

十月になつて五、六日ごろに薫は宇治へ出かけた。

「季節ですから網代の漁をさせてごらんになるとおもしろうございます」

と進言する従者もあつたが、

「そんなことはいやだ。こちらも氷魚とか蜉蝣とかに変わらないはかない人間だからね」

としりぞけて、多数の人はつれずに身軽に網代車に乗り、作らせてあつた平絹の直衣指貫をわざわざ身につけて行つた。宮は非常にお喜びになり、この土地特有な料理などを

作らせておもてなしになった。日が暮れてからは灯を近くへお置きになり、薫といつしよに研究しておいでになった経文の解釈などについて阿闍梨をも寺からお迎えになつて意見を言わせになつたりもした。主客ともに睡ることなしに夜通し宗教を談じているのであるが、荒く吹く河風、木の葉の散る音、水の響きなどは、身にしむという程度にはとどまらずに恐怖をさえも与える心細い山荘であつた。もう明け方に近いと思われる時刻にな

つて、薫は前の月の霧の夜明けが思い出されるから、話を音楽に移して言った。

「先日霧の濃く降っておりました明け方に、珍しい楽音を、ただ一声と申すほど伺いまして、それきりおやめになつて聞かせていただけませんでしたことが残念に思われてなりません」

「色も香も思わない人に私になつてからは音楽のことなどにもうとくなるばかりで皆忘れていきますよ」

宮はこうお言いになりながらも、侍に命じて琴をお取り寄せになつた。

「こんなことをするのが不似合いになりましたよ。導いてくださるものがあると、それにひかれて忘れたものも思い出すでしょうから」

と言つて、琵琶をも薫のためにお出させになつた。薫はちよつと手に取つて、調べてみたが、

「ほのかに承つた時のこれが楽器とは思われません。特別な琵琶であるように思いましたのは、やはり弾き手がお違いになるからでございました」

と言つて、熱心に弾こうとはしなかつた。

「とんでもない誤解ですよ。あなたの耳にとまるような芸がどこからここへ伝わってくる

ものですか、誤解ですよ」

宮はこうお言いになりながら琴をお弾きになるのであったが、それは身にしむ音で、すごい感じがした。庭の松風の伴奏がしからしめるのかもしれない。忘れたというふうにあそばしながら一つの曲の一節だけを弾いて宮はおやめになった。

「私の家では時々鳴ることのある十三絃はちよつとおもしろい手筋のように思われることもあります、私が熱心に見てやらなくなつてもう長くなりますからね。現在家の者の弾いているものは皆前の川の波音を標準にして稽古けいこをしているだけの我流の芸にすぎません。むろん普通の拍子には合わないものになつて居るのですよ」

そのあとで、

「箏そうの琴をお弾きなさい」

と姫君の居間のほうへ言つておやりになつたが、

「何も知らずに弾いていたのを、聞かれただけでも恥ずかしいのに、公然とまずいものをお聞かせできるものでない」

女王は二人とも弾くのを肯がえんじない。父宮はたびたび勧めにおやりになつたが、何かと口実を作つて断わり、弾こうと姫君たちのしないのを薰は残念に思った。宮は片親でお育て

になった姫君たちが素直にお言葉どおりのことをしないのを恥ずかしく思召すふうであった。

「女の子供のいることをなるべく人に知らせたくないと思つてね、私はだれも頼まずに自分の手だけで教育もしてきたのですが、もういつどうなるかもしれぬ命になってみると、さすがにまだ若い者は将来どんなふうにおちぶれてしまうことかと、その気がかりだけがこの世を辞して行く際の道の障りさわになる気がするのです」

とお言いになるのに、薫は心苦しいことであると同情された。

「表だちました責任者になりませんが、私の力でお尽くしのできますことだけは私がいちますから、御信用くださいといと存じております。しばらくでもあなた様よりあとに残つて生きていたしますれば、こうしたお言葉をいただきました以上、決してたがえることはいたしません」

薫がこう申し上げると、

「非常にうれしいことです」

と宮はお言いになった。

明け方のお勤めを仏前で宮のあそばされる間に、薫は先夜の老女に面会を求めた。これ

は姫君方のお世話役を宮がおさせておいでになる女で、弁の君という名であった。年は六十に少し足らぬほどであるが、優雅なふうのある女で、品よく昔の話をしだした。柏木かしわぎが日夜煩悶はんもんを続けた果てに病を得て、死に至ったことを言つて非常に弁は泣いた。他人であつても同情の念の禁じられないことであろうと思われる昔話を、まして長年月の間、真実のことが知りたくて、自分が生まれてくるに至つた初めを、仏を念じる時にも、まずこの真実を明らかに知らせたまえと祈つた効験でか、こうして夢のように、偶然のめぐり合わせで肉身のこと聞かれたと思つている薫には涙がとめどもなく流れるのであつた。「それにしてもその昔の秘密を知つている人が残つておいでになつて、驚くべく恥ずかしい話を私に聞かせてくださるのですが、ほかにもまだこのことを知つている人があるでしょう。今日まで私はその秘密の片端すらも聞くことがありませんでした。」

と薫は言つた。

「小侍従と私のほかは決して知つている者はございません。また一言でも私から他人に話したこともございません。こんなつまらぬ女でございしますが、夜昼おそばにお付きしていたものですから、殿様の御様子に腑ふに落ちぬところがありまして、私が真実のことをお悟りすることになりましたからは、お苦しみのお心に余りますような時々には、私から小侍

従へ、小侍従から私と言うことにしまして、たまさかのお手紙をお取りかわしになりました。失礼になつてはなりませんからくわしいことは申し上げません。殿様の御容体が危篤になりましてから、私へほんの少しの御遺言があつたのでございますが、私風情ふせいではどうしてそれをあなた様にお伝え申し上げてよろしいか方法もつきませんで、仏に念誦ねんずをいたします時にも、そのことを心に持つてしておりましたために、あなた様にこのお話ができることになりました、仏様の存在もまた明らかになりました。お目にかける物もあるのです。ございます。お渡しいたすことができせん以上はもう焼いてしまおうかとも存じました。危うい命の老人が持つていまして、歿後ぼつごに落ち散ることになつてはならぬと気がかりにいたしながら、この宮へ時々あなた様が御訪問においでになることがあるようになります。からは、これはよい機会が与えられるかもしれぬと頼もしくなりました、今日きょうのようなおりの早く現われてまいりますようにと、念じておりました力はえらいものでございますね。人間がなしかれたこととこれは思われません」

弁は泣く泣く薫の生まれた時のこともよく覚えていて話して聞かせた。

「大納言様がお亡かくれになりました悲しみで私の母も病氣になりました、その後しばらくして亡なくなりましたものですから、二つの喪服を重ねて着ねばならぬ私だったのでございま

す。そのうち長く私のことをかれこれと思っていた者がございました、だましてつれ出されました果ては西海の端までもつれて行きましてね、京のことはいっさいわからない境遇に置かれていますうちに、その人もそこで亡くなりましてから、十年めほどの、違った世界の気がいたしますような京へ上つてまいったのでございますが、こちらの宮様は私の父方の縁故で童女時代に上がっていたことがあるものですから、もうはなやかな所へお勤めもできない姿になっております私は、冷泉院れいせいの女御様にょごなどの所へ、大納言様の続きでまいつてもよろしかったのでございますが、それも恥ずかしくてできませんで、こうして山の中の朽ち木になっております。小侍従はいつごろ亡くなったのでございましょう。若盛りの人として記憶にございます人があらかた故人になっております世の中に、寂しい思いをいたしながら、さすがにまだ死なれずに私はおりました」

弁が長話をしている間に、この前のように夜が明けはなれてしまった。

「この昔話はいくら聞いても聞きたりないほど聞いていたく思うことですが、だれも聞かない所でまたよく話し合います。侍従といった人は、ほのかな記憶によると、私の五、六歳の時にわかに胸を苦しがりだして死んだと聞いたようですよ。あなたに逢うことができなかつたら、私は肉親を肉親とも知らない罪の深い人間で一生を終わることでした」

などと薫は言った。小さく巻き合わせた手紙の反古ほごの黴臭かびいのを袋に縫い入れたものを弁は薫に渡した。

「あなた様のお手で御処ごところ分わかりくださいませ。もう自分は生きられなくなつたと大納言様は仰せになりました、このお手紙を集めて私へくださいましたから、私は小侍従に逢いました節に、そちら様へ届きますように、確かに手渡しをいたそうと思つておりましたのに、そのまま小侍従に逢われませんでした。私情せいちやうだけでなく、大納言のお心の通らなかつたことになりました。私は悲しんでおりました」

弁はこう言うのであつた。薫はなにげなくその包を袖そでの中へしまつた。こうした老人は問はず語りにも、不思議な事件として自分の出生の初めを人にもらすことはなかつたであろうかと、薫は苦しい気持ちも覚えるのであつたが、かえすがえす秘密を厳守したことを言つていたのであるから、それが真実であるかもしれないでもなかつた。

山荘の朝の食事に粥かゆ、強飯こわめしなどが出された。昨日きのうは休暇が得られたのであるが、今日は陛下の御謹慎日も終わつて、平常どおりに宮中の事務を執らねばならないことであらうし、また冷泉院の女にょいち一の宮みやの御病氣もお見舞い申し上げねばならぬことで、かたがた京へ帰らねばならぬ、近いうちにもう一度紅葉もみぢの散らぬ先にお訪ねするということを、薫は

宮へ取り次ぎをもつて申し上げさせた。

「こんなふうにしたびたびお訪ねくださる光榮を得て、山蔭やまかげの家も明るくなってきた気がします」

と宮からの御挨拶あいさつも伝えられた。

薫は自邸に帰つて、弁から得た袋をまず取り出してみるのであった。支那しなの浮き織りの綾あやでできた袋で、上という字が書かれてあつた。細い組み紐ひもで口を結んだ端を紙で封じてあるのへ、大納言の名が書かれてある。薫はあけるのも恐ろしい気がした。いろいろな紙に書かれて、たまさか来た女三の宮のお手紙が五、六通あつた。そのほかには柏木かしわぎの手で、病はいよいよ重くなり、忍んでお逢あいすることも困難になつたこの時に、さらに見たい心の惹ひかれる珍しいことがそちらには添そつている、あなたが尼におなりになつたということもまた悲しく承うつていてというようなことを檀紙だんし五、六枚に一字ずつ鳥の足跡のよう

目の前にこの世をそむく君よりもよそに別わかれる魂たまぞ悲しき

という歌もある。また奥に、

珍しく承った芽ばえの二葉を、私風情ふせいが関心を持つとは申されませんが、

命あらばそれとも見まし人知れず岩根にとめし松の生おひ末

よく書き終えることもできなかつたような乱れた文字でなつた手紙であつて、上には侍従の君へと書いてあつた。蠹しみの巢しほのようになっていて、古い黴臭かびい香もしながら字は明めいり瞭ように残つて、今書かれたとも思われる文章のこまごまと確かな筋の通っているのを読んで、実際これが散逸していたなら自分としては恥ずかしいことであるし、故人のためにも気の毒なことになるのであつた、こんな苦しい思いを経験するものは自分以外にないであろうと思うと薫の心は限りもなく憂鬱ゆううつになつて、宮中へ出ようとしていた考えも実行がものうくなつた。母宮のお居間のほうへ行つてみると、無邪気な若々しい御様子で経を読んでおいでになつたが、恥ずかしそうに経巻を隠しておしまひになつた。今さら自分が秘密を知つたとはお知らせする必要もないことであると思つて、薫は心一つにそのことを納めておくことにした。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月10日4版を使用しました。

入力：上田英代

校正：鈴木厚司

2004年3月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

橋姫

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>